哲学の本丸を照らし出そうとする試み

存在論の祖パルメニデスの思惟と生涯に迫る独創的な書

武井徹也

山川偉也 著
▶パルメニデス
錯乱の女神の頭上を越えて
1・11刊 四六判344頁 本体2100円
講談社選書メチエ

「西洋哲学の伝統のもっとも安全な一般的性格付けは、それがプラトンについての一連の脚注からなっているということである」。およそ百年前、英国の哲学者ホワイトヘッドはこの有名な言葉を述べた。だが後英アンスコムは、哲学の伝統はむしろ、プラトンに先立つパルメニデスの脚注ではないかという見解を示している。本邦の古代哲学研究の碩学である山川偉也氏の『パルメニデス――錯乱の女神の頭上を越えて』は、このソクラテス以前の哲学者パルメニデスに焦点を当て、深遠なその思惟の本質を、また謎多き彼の人物像を照らし出そうとした意欲作である。

紀元前五世紀の古代ギリシアで活躍したパルメニデスは、哲学史上はじめてものごとが「ある」ということを表立って思惟し、以降の哲学に決定的な影響を与えたことで知られる。パルメニデスが興したこのような「ある」についての思惟は、哲学では「存在論」とよばれ、哲学の伝統の根幹をなしてきた。二十世紀最大の哲学者の一人と目されるハイデガーもまた、存在論の祖パルメニデスを強く意識しつつ「ある」についての彼独自の思惟を展開している。このような意味で今なお、パルメニデスは哲学の本丸であり続けているのだ。

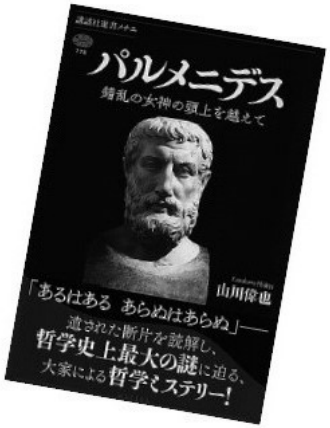
さて本書の内容については、独創的というほかはない。パルメニデス研究では、断片として遺されたパルメニデスの哲学詩『ペリ・フュセオース』（一般には『自然について』と訳される）を解読しつつその思惟の本質を解明せんと優れた研究が積み重ねられてきた。女神による神宣の様式で紡がれるこの哲学詩は、「序歌」、「真理の道」、「思惑の道」の三部からなり、各部間の整合的な解釈がパルメニデス解釈の大きな鍵と見なされている。だが著者は、従来の研究者たちが看過してきた「序歌」の新たな読みを提案し、その解釈を基点にしながらパルメニデスの思惟全体の解釈を、さらにはパルメニデスその人の生涯の解釈を試みるのである。

「序歌」は、女神のもとに「わたし」が赴くさまが歌われる導入部であるが、その三行目は従来、「すべての街々（アステー）を越えて」などと読まれ、人間の世界から神々の世界への参上などとして解釈されることが多かった。しかし著者は写本に遡った「錯乱の女神（アーテー）によって囚われ欺かれたすべての人々の頭上を越えて」という新しい読みを提案し、これを錯乱の女神（アーテー）が支配する人間界（錯乱の原郷）から真理（アレーティア）を宣べる女神の世界（真理の原郷）への逃亡として解釈する。そして著者はこの詩句の解釈に基づいて、パルメニデスの哲学詩『ペリ・フュセオース（自然について）』の真の主題は、真理による「カタルモス（浄化・救済）」であるとする斬新な解釈を提示する。

続く「真理の道」と「思惑の道」は、女神が「あるもの」が「ある」ということの深遠な真理と思惑を宣べる主要部であるが、著者はこれまで峻別して解される傾向の強かった「真理の道」と「思惑の道」を、真理による浄化・救済という主題の解釈に即して一体的に把握することを試みる。この類例のない試みのもとで、女神によって明らかにされるパルメニデスの「ある」についての存在論的な思惟は、著者が「エレア的アルゴリズム」と称する独自の文法的観点から詳細に解釈されてゆく。

さらに著者は、真理による「浄化・救済」としての哲学詩の解釈を背景として、資料上不明な点の多いパルメニデスの人物像についても驚くべき解釈を試み、祖国エレアで哲学者・政治家・立法家・医師として生きたパルメニデスその人の生涯を大胆に描き出そうとする。「浄化・救済」をキーワードにパルメニデスの諸論点を貫くこのような独創的な解釈の展開が、本書の最大の読みどころとなっている。著者が本書を「ミステリー仕立て」とよぶ所以であろう。

ただし本書には、読者にやや不親切な点も見受けられた。たとえば「序歌」の解釈が示される第二章であるが、本章の十分な理解には古代ギリシア語と古代哲学研究の一定の素養が必要になる。著者自身の学術論文を下敷きにした第二章は、本書全体の内容の核・要をなしているが、その叙述は一般書の体裁の本書では専門的に過ぎるように評者には思われた。著者の意気込みに反して、一般の読者の多くが序盤の本章で本書を閉じたり理解を諦めたりすることが懸念される。

とはいえ、ともすればプラトンやアリストテレス、また近現代の哲学者たちに隠れがちなパルメニデスを取り上げた書籍が本邦初の一般書として、しかも概説ではなく最新研究の現場を伝える一般書として公刊された意義は大きいであろう。山川氏自身は、本書もまた従来の研究者たちの著書と同様、「パルメニデスをめぐる一つの思惑」にすぎないであろうと率直に評している。しかし哲学研究に関わる人にはもとより、哲学を深く学び知りたい人にも、哲学の可能性を見定める基本文献の一つとして本書を読む価値はある。

（立正大学人文科学研究所研究員）